令和７年度　第２回学校運営協議会　議事録（要旨）

１　開催日時

令和８年２月 17 日（火）　10:00～11:10

２　会場

高田高校会議室

３　出席者

学校運営協議会委員８名（うちオンラインによる出席２名）

学校関係者 10 名

４　概要

開会、校長挨拶の後、及川副校長から学校運営実績、学校評価の結果、高田高校の魅力化についての説明を行った。それぞれの説明後に、質疑・応答、次年度の学校運営協議会について説明を行って閉会した。

５　質疑・助言

【令和７年度における学校運営実績に関する質疑・助言、応答】

〇委員

クのその他の主な教育活動について、関西方面への修学旅行ということで２年生が大阪方面を訪れたということであった。ＵＳＪを訪れたのが日曜日と聞いている。土日のＵＳＪは混んでいて、子供たち十分に遊べなかったのではないか満喫できなかったのではないかという保護者からの話も聞いている。保護者の方に簡単な説明があったほうが良かったのではないか。このことについて伺いたい。

〇副校長【回答】

修学旅行については、一年生の段階から計画を立てて、業者から見積もりを出してもらい決定している。

〇校長【回答】

２学年ＰＴＡで修学旅行について説明し、そこで質問は出てなかったが、念のために説明すればよかったと思う。今後気をつけたい。

〇委員

ウの防災減災の関係について、津波の警報の時にはどういったマニュアルなのか。警報時に学校よりも低いところへ下っていくことはないものと考えている。どのような対応をとっているのか伺いたい。

〇副校長【回答】

本校には危機管理マニュアルがあり、津波警報、注意報に対して、それぞれどういう動きをするかが決まっている。教育活動中に警報が出た場合、学習活動をやめて、すぐ

に避難、校舎内避難をしている。例えば第一グランドで部活動をしていても、校舎がある高台に上がってくることにしている。津波注意報に関しても、基本的には教育活動中止まではないのだが、下校の際には、そのまま生徒を帰すわけではなく、保護者と連絡を取りながら帰す形をとっている。

○委員

校舎より低い場所に下って帰ることはないと思っている。津波の被害があったところに向かって帰るのは違うと感じている。

○校長【回答】

それに関しては、生徒の帰宅する経路を確認しながら、津波の浸水区域に行かないようにして下校させている。

○委員

少子化が進んで、高校の努力だけではもう難しく、中学生そのものの数が減ってきている。十年後を見ると、今の小学生も本当に減ってきており、高校に進学するのが、非常に少なくなっていくっていうのは仕方がないと思う。何か対策や考えがあれば聞かせて頂きたい。

○校長【回答】

対策については、今取り組んでところをどこまで充実させ続けられるかということである。本校の教育活動の充実と、その情報発信で魅力と感じてくれている生徒がいるというところである。県内の遠いところから生徒が来てくれている。現在、陸前高田市のご支援で市営住宅に生徒を入れるという形になっている。高田高校の近辺に必ずしも市営住宅の空きがあるわけではない。教育活動の充実と情報発信によって、現時点での応募者が増えている。住む所等の問題が課題としてある。

○委員

いじめについて、他の生徒の皆さんについての、フォローや説明など何かされていることがありましたら伺いたい。

○校長【回答】

集団生活をしていると人間関係のトラブルは当然ある。残念がことだが、いじめ問題が出てくるものだと思っている。このことを踏まえて、現在も効果的に続けている活動がある。１，２年生で４月に行う出会いのワークという名の、グループエンカウンターである。これによって不登校や転学する生徒の数が激減した。出会いの次にソーシャルスキルトレーニングといった取組が必要だと思っている。ソーシャルスキルトレーニングのようなことを通年どのようにして実施できるかについて考えている。

いじめに関しては適切に対応しなければならない。我々スタッフの側にも大きな責任がある。今後も適切に対応していくことが課題だと認識している。

【令和７年度学校評価及び学校関係者評価について】

ア　基礎基本の定着と学力の向上を図るについて

〇委員

生徒が分かりやすいという割合が 94%ということで、このままでいいと考える。

イ　地域と連携協働した教育活動を推進するについて

〇委員

特色ある教育活動で様々なことに取り組んでいる。回数も年 20 回以上取り組んでおり、月に２回、２週間に１回程度で実施されていると読み取れる。先生方の大変な努力が感じられる。

ウ　復興・防災・減災教育を充実させるについて

〇委員

防災のマニュアルについてのお話もあったが、マニュアルの中には、いろいろ書いてあると思う。学校にいる時は避難行動を団体で対応できると思う。学校以外での対応についてもマニュアルにも書いてあると思うが、生徒に徹底をしていただきたい。15 年前の震災の時も部活動をして被害があったこともある。一人一人への教育が大事であると思う。徹底していただきたい。

エ　海洋システム化への活性化を図るについて

〇委員

重点目標の説明の際に話があったが、これまでの取組に加えて、中学校のとの連携というものをさらに推進させていくという説明をいただいた。これについて、地域全体として、浜の人は興味あるけれども、地域全体としてのリーダーに対しての興味をさらに深めるという意味で、評価できる。

〇委員

宮古水産高校との統合の話と関連するが、令和 10 年度に向け、今のうちから連携の形を作り、交流を図るなど、活性化につなげていくように検討いただきたい。

〇校長【回答】

岩手県に３つの水産高等学校があり、久慈翔北と宮古水産、本校である。潜水実習のように３校が連携を図っているものがある。今年度は三崎、来年は沖縄の予定である。また、生徒の体験発表と研究発表があり、連携を図っているが、全ての生徒が対象になっているというわけではない。そういう意味では、もう少し連携を図っていく必要があると思っている。ご指摘に感謝したい。

〇委員

令和 10 年度からということで、すぐそれが起きるのかもしれない。遠くの学校に行くということは、そこで生活をしなければいけない。衣食住を整えることが大事である。統合後に生徒さんがどのようにそれらが保障されるのかについては、高田の側から意見を言っていいのではないと思っている。高田の方々で、漁業を生業とする方が一定程

度おり、人数は少なくなったかもしれないが、希望する生徒はいると思う。そういう人が進学するときに、その衣食住の心配があって進学できないことがないように、県の方に高田高校の方から要望を出していただいて。進学を支える観点で、整備していただけないかという意見を言ってもいいと思う。ぜひそのようにしていただければと思う。

オ　生徒の人権を尊重し、不適切な指導を根絶する組織づくりを推進することについて

〇委員

保護者、生徒ともに約 95%の肯定的意見というアンケート結果があり、教職員と生徒の良好な関係性があることがわかる。

カ　実効的に機能する学校いじめ対策組織を構築し、組織。責任いじめの未然防止、適切な対処に当たるについて

〇委員

積極的にいじめを認知していることがわかった。生徒へのフォローを充実させ、生徒が安心して学校生活を送れるように指導願う。

その他

〇委員

高田高校に来て市営住宅等で生活している生徒さんがいることは伺った。その生徒さんに対して家賃の支援のようなものが、陸前高田市や県からあるのか。学校外で、市営住宅等でトラブル等があった場合は、学校が関与しているのか。それとも学校外なので個人で対応することとしているのか。どのようなスタンスを取っているのか伺いたい。

〇校長【回答】

本当に心配なところである。市営住宅なので、家賃は安く 1 万円程度である。食費別という問題と、不便なところがある。

市営住宅でのトラブルに対して、学校側が全く関わらないわけではなく、副校長が管理者で、何かあった場合には副校長に連絡がある。今年度、心配な事例があり生徒が引っ越した。警察にも相談している。何かあった場合には、学校側でも対応できるようにしている。市役所の担当の方のご協力なども含めながら対応している。安全安心に生徒が暮らせるようにしていきながら、食事や利便性が改善されたらさらに良くなると思っている

〇委員

先生方に対するアンケートで、分掌間の連携、職員の業務について評価が低いのが気になっている。生徒さんの教育にすごく熱心な先生方が、業務について少し課題を抱えているのは問題かなと思った。校長としてどのように考えているのか伺いたい。

○校長【回答】

連携が組織として有効に機能していないという話であると思う。業務の分担を適切にということについて、一つの業務を２人で対応し、主担当・副担当の形で分担しながらやっている。しかし、ある教員に業務が集中している状況がある。業務の分担に関して、協力して協働でやれるように進めているが、道半ばのところがあり厳しい状況である。来年度に向けて、校内の人事の配置についても改善が図れるように適切に工夫していく。

本校は学校の規模の割に非常に活発で教育活動が充実している。本校は、バレーボール、ソフトテニス、卓球が強い。新聞委員会も全国レベルである。そこでの業務負担が重くなる。非常にいいことではあるが、きついことでもある。

また、国際交流に関して、本校の規模、学校スタッフが少ない中で、３つ行っている。国際教養大学でのイングリッシュビレッジプログラムも含むが、本校の規模で３つの事業に取り組んでいるのは全国的に見ても珍しいことである。

総合的な探究の時間であるタクションを活発に行っている。そのため、２週間に１回ぐらいの割合で外部との連携を図っている感じであり、正直きついところはある。

来年度に向けて、業務の精選も含め、工夫していかなければならない。

６　閉会